

線香花火

今からもう十年余り前のことになる。その夏、私は野沢温泉近くの学生村に滞在した。ある日、民宿近くのなんでも屋さんの前を通りしなに何気なく店内をみると、幾束かの線香花火が無雑作に並べてあった。その晩、夕食が済むと友人と私は、買ったばかりの線香花火とマッチを持って外へ出た。夜の暗さは街とは比較にならないから、どこでもできそうな気がした。ところが普段夜を心細くさせている農家や民宿の窓の明りと街灯の裸電球の灯は、どれも思いのほか明るかった。明りの届かないところは畑中へ出てしまい、今度は風通しが良すぎた。結局、私たちは農家の納屋の陰に身を寄せ、他からの風は身体で遮るようにして、屈みこんだ姿勢で花火大会を始めた。時折風が廻り込んできて、マッチの火を消した。ライターを使うと、線香花火に慣れた眼には眩しすぎた。それでも子どものとき以来の線香花火は楽しく、美し

田中三保子



かった。だがこのささやかな催しも長く続けることはできなかった。蚊の大群が襲ってきたのである。初めは花火の魅力の方が強く、我慢していたのだが、そのうちどうにもたまらなくなつて宿まで走つて帰つた。明るいところで見ると手も足もまっかか、引掻いた跡に痒み止めの薬がヒリヒリと沁みた。

一昨年、長野県の穂高町にある知人の別荘を貸してもらつて、ほぼ一夏をそこで過した。別荘地は赤松と雑木の山林を少し開いて道を付けただけのところで、建物は丁度その中程に建てられていた。建物近くまで周囲の木々が迫っているために日中でも仲々陽はささず、夜などはベランダから首を出しても空模様を判別することができなかった。「星くすが降るような空」を眺めたいときは、道まで出て、なお空がなるべく切り取られていない場所を探さねばならなかった。かくてこの別荘のベランダはかっこうの

花火大会会場であった。ペランダに立つとどこにも灯はみえないし、月明りさえ届かなかつた。たまたま火が消えたりすれば、文字通り鼻をつままれてもわからぬ闇となつた。私たちはこのペランダで心ゆくまで花火を楽しんだ。

東京から友だちが訪ねてきたときも、早速花火大会を催した。私たちが東京から持参してきた花火のなかで、彼女は線香花火にととても感激してくれた。聞けば線香花火は初めてとのことであつた。一度帰京した彼女は、大量の「線香花火」をおみやげに再訪した。それは今までみたことのないものであつたが、構造的には普通の線香花火と類似してゐた。ただ火薬の部分はこよりもずっと長く、金色の細い紙が斜めに巻きつけあつて、きらびやかな装いをしてゐた。その晩、私たちはわくわくしながら花火を試みた。火をつけると黄色い炎が景気よく燃え昇つた。玉が落ちないようにと予めこより下の方を押えてゐたため、思いがけない火の勢いに思わず手を放してしまつた。二本目はずっと上部を持つてみたが、火を噴き出し終るとそのまま燃え尽きたようだつた。それでもいつ火花がとび出すかと、息をひそめて暫く燃えさしを見守つてゐた。要するにこのときまで、私たちは全員、この火花が新式の、あるいは洋風の線香花火であることを疑わなかつたのである。彼女は自分でもとても落胆し、私たちに盛んにすまな

つた。店のおばさんに念を押したのにと、というのが彼女の話だつた。暫くして、私たちは火薬を巻いている紙の色と、噴き出す炎の色が同じであることを発見した。こよりの方はといえば、線香花火のときに向けられた注意深さとは反対に、振り回すために用いられたのは皮肉であつた。

金田一春彦さんは、上と下のことを逆にしても意味が変わらない数少ない例として、線香花火をあげておられた（「ことばの歳時記」）。この話を初めて読んだとき、花火線香という言い方を聞いたことがなかつた私は、それでは火のついた方を上に向けて持たねばならず、不自然だと思つた。先日、編集者の方から取材旅行のおみやげに花火をいただいた（花火の魅力に負けたおかげで、この原稿を書くはめになつた）。その中に、「関西の線香花火」という注釈付きの花火があつた。十数センチのごく細い竹ひごの先に黒い火薬がむき出しのまま固められているだけのものだつた。形に見覚えがあつたが、燃え方は、どんな風だつたか記憶がなかつた。改めてやってみると、形の違いにもかかわらず普通の線香花火と同じ燃え方をした。しかし、火玉がくっついてゐる竹も燃え進んでいくので、火花をとばさないうちにほとんど落ちてしまつた。よくみると、袋の端に、斜め上にして火をつけること、風が少しあるところでは火花がよく出ることなどが書かれて

あつた。その通りにすると、確かに火玉は竹の端にぶらさがつたままで、息を少し吹きかけると火花は威勢よく飛び交つた。それはさておき、私は線香火花にも東西があることを知ると同時に、なるほど、これは火花線香だとひとり納得した。

ちがう線香火花をみるとつい買つてしまふのだが、実際に一夏でやり終えることはなかつた。だから種類の異なる線香火花が年々たまることになった。初めの頃、線香火花が仲々手に入らないせいもあつて、残りはビニール袋に乾燥剤とともに入れ、大切に保存していた。しかし、段々ずぼらになつてきて、ただ本棚の隅などに置きっ放しの状態が多くなつた。夏になるとそれらは寄せ集められた。ずさんな管理をちよびり後悔しながら火をつけるのだが、不思議にいつも鮮やかな火花をとばしてくれる。滅多なことでは湿らないものらしい。

多くの線香火花をやつてみると気づくことだが、線香火花にも随分違いがある。炎が上に昇つていき、まっかな丸い玉になるまでの様子、玉から松葉模様（この形容は歌謡曲で知つたのだが、ひばの葉の方が近いのではないかと私は思つている）が飛び散るまでの時間、松葉の大きさと飛ぶ距離など少しづつ異なる。火薬部分の大きいものは総じて火花も大きいのだが、玉が落ちるまでの時間は必ずしも火薬量に比例しない。同じ束内の個体差より

も種類の差の方が明らかに大きいようで、玉の落ち易いものは、あれこれ持ち方を工夫してみても、風向きを考え、息をこらしてみても、落ちてしまふ。火玉の命は製作所の腕に依つているのであろう。期待をこめた小さな火の玉が、発火しないうちに、もしくは宴半ばに火花をとばしながら闇に落ちていく瞬間は、何ともやるせないものである。ひとはそこに人生のある一面をみたりする。

最近、日本の古いものが若い人の間に人気があるようで、バラ売りの線香火花を目にすることも多くなつたように思う。昨年の夏、同じ店で値段が倍違う二種類の線香火花を見つけた。どこが違うのかという好奇心もあつて買ってみた。高い方は火薬の部分も大きくて、彩色も鮮やかで、やってみるととびだす火花の模様は大きく立派で、時間も長かつた。もう一方はというと、形が小ぶりであるというだけではなくて、彩色の部分も思い切り少なかつた。そして何よりもそれが出す火花は貧弱で、弱々しかつた。こんなにも差のある線香火花が同じ店に並んで売られていた、そのことを考えているうち、私は段々腹が立つてきた。線香火花にまで格差をつけることに一体どんな益があるというのだろうか。一緒に並べられた安い線香火花があまりにわびしく、貧相にみえて、悲しかつた。

（お茶の水女子大学附屬幼稚園）